

楽しい仏教用語

その22

【看病（かんびょう）】

病人を看護することを看病というのは、誰でも知っています。これが仏教からきた語であること、を知っている人は少なく、むしろ死んでからが僧侶の仕事だと思っている人さえいます。

ところが、『大言海』には「僧侶の説法、呪法などして病者を癒すこと」を、看病の意味に挙げています。

『梵網經』には「看護福田は第一の福田なり」と、看護が仏教の重要な行いであることを説いています。

仏教の修行者のことを看病者というぐらいです。

最近「ビハール」とか「ホスピス」という語をよく耳にします。それは「病院では見放された治る



本堂前の石（奥田緑様ご寄贈・昭和58年）
善教寺「石」シリーズ その4

【祇園（ぎおん）】

見込みの少ない人々を、さまざまな苦しみや死の不安から開放するために、一人の病める人間として暖かく看護し、最後の一瞬まで精一杯生きることを援助する、一つの全人的な看取りの運動、施設、心を意味する」と、ビハール講座で説かれます。

宗教者が看護に取り組むのは、そうした意味に基づきます。

インドの舎衛城に一人の富豪がいました。孤独な人を哀れみ施しをしたので、給孤独（きつこどく）長者と呼ばれていました。

長者はお釈迦さまに深く帰依し、寺院を寄附したいと探しまわって見つけた土地が、祇陀（ぎだ）太子の土地でした。太子は、土地に金貨を敷きつめたら譲ろうと、冗談で言ったところ、長者はその通り実行し始めたので、太子は驚き長者の熱心さにくたれ、土地を譲り、自らも樹木を寄附して寺院建設に協力しました。

この由来から、寺院は両者の名をつけて「祇樹給孤独精舎」一略して祇園精舎といいました。

京都の祇園は、平安時代に藤原基経が牛頭祠を建て、祇園精舎の故事にちなんで祇園社と名づけたところから始まったのです。

（辻本敬順氏「仏教用語豆辞典」参照）

住職レター

桜が満開の四月の上旬、花冷えを通り越して、今年は寒かったように思います。ですがもうすぐ、「暑くなったね」と言葉が交わされるようになるでしょう。

さて来月（五月二十六日）、毎年恒例の「初参式」を勤めます。

「初参式」とは、お子さまの誕生後、

初めて仏さまの前で手を合わせ、お祝いする仏教行事。

生まれたばかりのお子さまも、みるみるうちに体も心も成長

していくことでしょう。その最初のときに、お子さまと共に親

御さまも仏さまに手を合わせ、生まれたことの意味を確かめて

いただく、大切な儀式です。親として生きる出発点であり、赤

ちゃんによつて与えられた尊い仏縁であります。



初参式（平成24年5月27日開催）

子供が生まれると、お宮参りが当たり前と思われる、しているかもしれませんが、こうしてお寺でも、「初参式」という大切な儀式があります。

どうぞ、ご家族おそろいでお参りください。お子さまには、善教寺仏教婦人会より、記念品を贈ります。



記念品をお渡しするところ（平成24年初参式）